

郊外団地における外国人住民の社会統合についての研究（2）

——移動経験にもとづく生活戦術からの考察——

上智大学大学院 伊吹唯

1 目的

移民の社会統合は、ホスト社会の枠組みのなかでどのように移民を受け入れるかという観点から論じられてきた。一方、トランスナショナリズム研究に見られるように、移民が移住先においても出身国とのつながりを保持し、ホスト社会の国民国家の枠組みだけに規定されない生活世界を持つことも指摘されてきた。

一見矛盾すると考えられてきた社会統合と移民のトランスナショナリズムだが、近年、両者の相互作用を明らかにする研究も行われている (Erdal and Oeppen 2013 など)。他方、日本の公営団地と外国人住民についての先行研究は、主に、①日本人住民と外国人住民の「共生」のあり方、②ホスト側の外国人住民への対応のあり方、③外国人住民の労働、教育などの実態についてのものに分類される。すなわち、既存の研究では、団地という小社会への外国人住民の統合のあり方が中心に論じられ、外国人住民が持つトランスナショナルな生活世界やそれとかれらの社会統合の相互作用については、十分に研究されてこなかった。そこで、本報告では、外国人住民のトランスナショナルな移動経験が、かれらの団地やその周辺地域における生活の中でどのように位置づけられているかを明らかにすることを目的とした。

2 方法

上記目的を踏まえ、X 地域の外国人住民 25 名を対象としたインタビュー調査を行った。人はライフストーリーのなかで自らの生活戦略を語る傾向にある (桜井 2005)。外国人住民の生活戦術のなかで、これまでの移動経験がどのように位置づけられているかを明らかにすることを主な目的とし、ライフストーリーを中心とした聞き取りを行った。

3 結果

インタビューでは、かれらが感じる団地や地域社会、職場における自分に対する期待や、それにどのように応えようとしているか、疑問、不満、将来的な移動の可能性などが語られた。

4 結論

本調査では、外国人住民が、出身国との往来や将来的な移動の意思の有無に関わらず、地域社会との相互作用に加え、出身国での経験や出身国と日本の間の往来の経験なども参照しながら、現在の X 地域における生活戦術を語ることが明らかになった。かれらの語りは、出身国の在外同胞政策や経済、社会の状況、出国時の状況、日本社会の経済、社会状況、X 地域の状況、職場や地域のコミュニティとの関わりなどをもとに、個々のなかで X 地域と出身社会が位置づけられていることを示している。このことから、外国人住民のなかでトランスナショナリズムと統合が単に併存しているというよりも、かれらが状況に応じて X 地域や出身社会との関係性を流動的に変化させているダイナミクスが明らかになる。

参考文献

- Erdal, Marta, Bivand and Ceri Oeppen, 2013, "Migrant Balancing Acts: Understanding the Interactions Between Integration and Transnationalism", *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 39 (6): 867-84.
- 桜井厚, 2005, 『境界文化のライフストーリー』せりか書房。